

Title	ワイトゲンシュタインと宗教的信念
Sub Title	
Author	間瀬, 啓允
Publisher	三田哲學會
Publication year	1979
Jtitle	哲學 No.69 (1979. 3) ,p.132- 133
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	三田哲学会例会記録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000069-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ウィトゲンシュタインと宗教的信念』

間 瀬 啓 允

Norman Malcolm は 'Ludwig Wittgenstein, A Memoir' のなかで, Wittgenstein の宗教にたいする態度という困難な主題に言及して, 次のように述べている。「Wittgenstein はかつて, 神という概念はそれが自分自身の罪の自覚ということに含まれている限り, 自分にも理解できると思う, と述べたことがある。それに加えて, 自分には創造主という考えかたが理解できない, とも言った。思うに, 神の審判, 赦し, 贖罪といった思想は, かれの心のなかでは, 自分自身にたいする嫌悪感, 純粹さにたいする強い渴望, 自己を改良できない人間の無力さといった感覚に関係していたがために, かれにとって少しは理解できるものであったろう。これにたいして, 世界を創造する存在といった概念は, かれにとってはまったく理解できないことであった。」Wittgenstein は自分自身の性格と経験とから, 審く神, 贖う神という考えには納得できても, 原因とか無限という概念から導かれる神には納得できなかったのであり, また「神在りの」証明とか, 宗教に合理的な根拠を与えようとする試みにたいしてはまったく我慢がならなかったのである。この意味においては, かれは William James の pragmatism と同様に, 伝統的な主知主義的観点にたいして完全に背を向ける。かれにとって宗教的信念とは, 検証なり反証なりの可能な仮説でもなければ, 高い確率でもなく, また知識でさえもなかった。それは証明や根拠をもものともせず飛翔するものであり, それでいて人々の生活の一切を整序し, これに甚大な影響をおよぼすものであった。これは「〈神在り〉とする宗教的信念が, これをもつ人々の生活においてどのような働きをしているかを見よ」と主張した Wm. James への接近である。事実, かれは James の 'The Varieties of Religious Experience' から方法論的なアイデアを学びとっている。かれは James と同様に, 一方的な dogmatism を避けて, 宗教的な概念とその使用の 'varieties' を理解しようと努めたのである (たとえば『哲学探究』593を見よ)。

さらに Malcolm はさきの 'A Memoir' のなかで, Wittgenstein における宗教の可能性を論じて, 次のように述べている。「思うに, かれは宗教を (『探究』の表現を用いれば) 一つの〈生活の形〉とみなし, 自分自身はこれに参加しないが, それに同情的で, 大きな関心をもっていた。これに参加する人々をかれは尊敬した」。すぐさま次のような疑問が出されるにちがいない。自分自身はこれに参加しないで

いて、ただそれに「同情的で、大きな関心をもってた」というだけで、宗教的信念が本当にわかったといえるかどうか、と。これにたいしては、次のように言うことができるだろう。かれは宗教的信念を分別、無分別の彼岸にあるもの、いわば「原現象」(proto-phenomenon)——後期フッサールのことばで言えば‘Ur-doxa’——であり、それゆえ人はいかなる説明をもこれに求めてはならない、ただ“*This language-game is played*”と云うのみである(『探究』654)として、「説明」を斥け、「純粹な記述」に踏みとどまろうとした、という点に注目すれば、さきの疑問は一応とりさげることができるだろう。

後期ウィットゲンシュタインは、宗教の語らひは言語の限界にさからって進むことだと述べ、「言語はけっして牢獄ではない」と明示的に言明する。そして「言語を絶したもの」が「生活の流れ」のなかに存すると見て、これを自然言語の文法のなかで捉えようと試みる。というのは、文法は公共のものであって、「生活の形」を示しているはずであるから、「文法を理解する」ということがそのものの理解に結びつくことになる、と考えたからである。そこでかれは、言語にたいする文法を、ゲームにたいするゲームのルールとの関係に似たものとして捉え、「言語をルールに従って行われるゲームであるという観点から考察しようとしたのである。そこで、たとえば「宗教の語らひ」(Talk of religion)という領域においては「宗教の言語ゲームがplayされる」といわれ、また文法という観点からもそれ(「宗教の語らひ」)は考察されることにもなるのである(たとえば『探究』373を見よ)。この分法の適用例は‘Lectures on Religious Belief’のなかに見ることができる。そこでは宗教的信念についての一つの「文法的な所見」として、“*He uses a picture*”という記述が与えられている。これは宗教的な概念が「絵」として信仰者によって使用され、この「絵」がかれの人生の導きとして、人生に甚大な影響をおよぼしている、ということを示そうとしたものである。しかしこれらの理論の展開の途上で、おそらくWittgenstein自身が明確な区別の意識をもたないままに混在を許してしまった二つの異なる方向にむかう思想——relativistでconventionalな方向と、pragmatistでempiricalな方向——が顕在化してしまった。おそらくこれらの思想の調停が、今後に残る課題の一つになるのではあるまいか。